アイリス・マードックの描くユダヤ人主人公
―*The Message to the Planet*（1989）と *A Fairly Honourable Defeat*（1970）を比較して

中　窪　　靖

本発表は、作品、『地球へのメッセージ』（1989）と『かなり名誉ある敗北』（1970）とを比較対照しながら、アイリス・マードックの作品の中に見られるユダヤ人主人公の役割について考察するものである。

『地球へのメッセージ』は長編ということもあり、いくつかのプロットが並行して進行する。この中から、アルフレッド・ルーデンスとマーカス・ヴァラーとの師弟関係に焦点を当てる。一方、『かなり名誉ある敗北』については、個性的なジュリアス・キングという人物が登場してルパート・フォスターの「傲慢（hubris）」の罪を裁く、という物語の中心となるプロットに焦点を当てる。

前者に於いては、半ば世捨て人のようになり精彩を欠く姿で現れるが、一方で、不思議な力を持つユダヤ人マーカスが登場する。後者では、悪を体現するユダヤ人ジュリアスが、凡人とは思えない周到さでその計画を実行に移していく。

弟子のルーデンスは、唯一人瀕死の詩人をよみがえらせることのできる師のマーカスを捜索する。詩人をよみがえらせた後、マーカスは再び世間とは隔絶した生活を始める。やがて、この奇跡の噂を聞きつけた一団の人々の崇拝の対象となるが、ある時期を境に姿を見せなくなり、やがて、一人生活をする施設の中で死体となって発見される。しかしながら、マーカスはそのあと再びその存在価値を示し始める。

弟子のルーデンスは、彼の死の原因を巡りまた、彼が死後に残したものを巡って、彼の師マーカスが人生の最後を過ごした療養施設の医師マージリアンと語り合う。後に残されたテープには、マーカスの肉声が残されていたが、二人にはそれを解読することはできない。また、マージリアンは、死の直前のマーカスの様子を、「罪なきものたち」と「邪悪なものたち」との対立の構図で語るが、その中で、マーカスのメッセージとして、「当たり前の道義心（ordinary morality）が存在しがたくなっている現代社会」について言及する。一方、『かなり名誉ある敗北』の中には、精彩を放つジュリアスの“明”に対して、生活すべてにおいて耐え忍ぶ“暗”の人物タリス・ブラウンがいる。人間の醜い部分をすべて包含する彼の姿は、人間の罪を負って磔になったイエス・キリストを思わせる。一方、マーカスが奇跡を起こすとき、彼はイエス･キリストのイメージと重なる。また、マーカスの死体が足をガスレンジに向けているところから、ユダヤ人の虐殺の象徴のガス室で最後を暗示しているなどと、解釈する批評家もいる。

ジュリアスの行為は、ルパートの「傲慢」の罪を曝け出させる。それを彼一人の力で完結する行為であるとすれば、一方で、マーカスは、彼の理解不可能なメッセージを解読し後世に伝えていく弟子が必要である。

今回の発表で取り上げた二作品は、その成立年代に19年の隔たりがある。その中で、マードックは、彼女自身の時代の捉え方の変化を、ユダヤ人主人公に託して表明しているのかもしれない。

（会員）